

# 『敵の前に備えられた宴』

礼拝プログラムに書きましたように、今日からカップヌードル・フェローシップを始めます。いったいカップヌードル・フェローシップとは何でしょうか。私がまだ神学生の時に毎日曜日、東京の市ヶ谷にあります韓国人教会に一年間、訓練のために遣わされていたことがあります。子供の日曜学校から始まって、礼拝があり、その後も色々なミーティングあり、目まぐるしい日曜日だったのですが、その教会では毎週、ランチタイムに教会スタッフに「辛（しん）ラーメン（韓国のカップラーメン）」が配られるのです。朝から動き回り、空腹となったお腹に、お湯を注ぎ、フーフーと汗をかきながら食べる時間が待ち遠しく、またスタッフ同士でホッとしながら過ごす束の間の時を今でも忘れられないのです。このことを最近、思い起こし、教会のランチは必ずしも時間をかけて準備しなければならないものではないとハッと思ったのです。

今年度の私達の教会標語は「友情を育む」です。多くの方達は毎日、とてもお忙しい日々をお過ごしでしょう。ウィークデーに教会の兄弟姉妹と会うことが難しいという方もいらっしゃるでしょう。礼拝後の様子を見ておきますと、時にその様は楽天市場のような光景であり、ある方を呼び止めてパーキングに行き、庭でとれたものをお渡しになったり、DVDの束が目の前を行きかたりと、とても活気があります。一週間で積もった話もありますでしょう、中には共に語り合い、祈りあっている姿をお見受けすることも多々あります。

私は基本的に皆さんに日曜日はなるべく早く家に帰って家族との時間を大切にしてくださいと願っています。しかし、時にはもう少し、「この人の話を聞きたい」、「話を聞いてもらいたい」、「祈りあいたい」、「学びたい」ということもあるでしょう。ランチに行くといっても、また場所を変えてというのも面倒だということもありますでしょう。そんな時にこのカップラーメンを気軽に用いていただけたらと思うのです。そのようにして互いの主にある友情を育んでいただきたいと思います。

このためにこの度はマルちゃんの「緑のたぬき」と「赤いきつね」を用意しています。この世界には「たぬき派」と「きつね派」という分派があるのを承知しています（ちなみに私は「たぬき派」ですが、きつねのジューシーな油揚げも捨てがたいと思っています）。無料で提供ということになりますと歯止めがきかなくなりますので、もともとの値段にちかく、提供できたらと願っております。希望

なさる方はどうかお声をおかけください。さて、それでは今日も詩篇23篇を見てまいりましょう。

1主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。2主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。3主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。4たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませんが、あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。5あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれます。6わたしの生きていくかぎりは必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう（詩篇23篇1節－6節）。

今日はこの中の『あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設けます』という言葉に注目したく願っております。そこには牧者なる主と羊なる私達の姿が描かれています。その牧者なる主に対してダビデは言うのです「あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設けます」。

この度のサバティカルの間を読んだ本の中に「国土が日本人の謎を解く」（大石久和著 産経新聞社）という書があります。その書には世界の多くの国々は隣国と地続きであるために、他民族の侵略というものを繰り返してきた長い歴史があり、そのために失われた人命というのはおびただしい数になるということです。それらの国々と比べてみます時に、日本は四方が海で囲まれておりますので、他民族の侵略とか大量虐殺というものを免れることができ、日本人にとりまして多くの人命が失われる出来事は、その時々起きる大きな自然災害だったのです。この違いは大きく、この本を読みながら「銃の規制」とか「戦争」ということについて、日本人の思いと世界各国の思いとに隔たりが今あるとするのなら、それは各々の過去の歴史をさかのぼって紐解いていかなければ、私達はお互いを理解することができないかもしれないと思われました。今の私達の思想とか価値観というのはとかく過去の経験とか歴史によって生み出されているものです。

ダビデの生涯はまさしく敵に囲まれる生涯でした。隣接する他民族からの侵略や略奪の危機が常につきまとう時代でした。宿敵が山の向こうにいて、自分達の出方をうかがっている、自分の首を狙うべく使者が送られてくるというようなことがイスラエルの王であり、武将であったダビデの日常でありました。その現実には非常に緊張感のともなうもので、もし彼がその敵に敗北するのなら、イスラエルの民、全てが殺されてしまうというような状況に彼はおかれていたのです。そんな

なダビデが『あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設けます』という詩を作ったということを私達は忘れてはなりません。

と言いましても、この時代に米国に住んでおります私達にとりまして「敵」というのはダビデが言うところの敵とは異なりますでしょう。もちろん国と国ということになりますと、ある国を敵対国家と定めて、銃口を向き合わさなければならぬということもあります。しかし、一般的に「私」という一個人の命を狙うべく、そのチャンスをうかがっているという敵は私達の回りにはそう滅多にはいません。

しかし、この社会で私達は複雑な人間関係の只中にあり、その中では騙されたり、脅されたりしなければならないことがあり、明らかに敵意をもって私達を攻撃してくる人がいるということなら十分ありうることです。この詩篇の言葉をさらに広げて解釈して「敵」というものを「自分を悩ます諸問題」とするのなら、さらに私達には思い当たるものが見えてきますでしょう。主はそのような状況の中にありながらも私達のために宴を設けてくださるというのです。

先週、お話ししましたようにダビデの息子、アブサロムが父ダビデに反旗をひるがえし、追われるようにしてダビデが都落ちした時、メピボセテの僕によって大量の食事がダビデに提供されました（サムエル記下16章1節－2節）。さらにダビデが窮地に陥った時、彼はアンモン人により、豪勢な食事が提供されました（サムエル記下17章27節－29節）。

このことは実際にダビデが敵に追われている時に起きたことで（我が子を敵と呼ばなければならないことは辛いことですが）、今でならそれが逃亡先であっても、その土地にあるレストランにでも入れば食をとることができたでしょうが、当時、食事一つとってもそれを取ることは難しいことであつたに違いありません。ダビデが与えられた食事は確かに人を介して彼に提供されたものですが、ダビデはそれを神様が敵の前で自分のために備えてくれた宴なのだと言信を持って受け止めたのです。

思えばこれはダビデだけに神様がなされたことではなくて、さかのぼることエジプトを脱出したイスラエルの民は行く先々で色々な困難に向き合い、他民族の脅威と戦わなければならない時がありましたが、神様は朝ごとに彼らが食べるマナを備えてくださったと聖書は記録しています。

預言者エリヤはバアルの神々との戦いに勝利した後、アハブの妻、イゼベルから殺戮の予告を受け、恐れます。力を失います。そして彼は荒野へと逃げます。そうです、エリヤは彼らとの戦いに勝利したのですが、その脅迫に全く意気消沈してしまい、神に訴えるのです「主よ、もはやじゅうぶんです。今わたしの命を取ってください」（列王記上19章4節）と。そこまで彼は追い詰められていました。主はそんな彼に何をしたのでしょうか。神様はその時、御使いを彼のもとに送りました。

5彼（エリヤ）はれだまの木の下に伏して眠ったが、天の使が彼にさわり、「起きて食べなさい」と言ったので、6起きて見ると、頭のそばに、焼け石の上で焼いたパン一個と、一びんの水があった。彼は食べ、かつ飲んでまた寝た。7主の使は再びきて、彼にさわって言った、「起きて食べなさい。道が遠くて耐えられないでしょうから」。8彼は起きて食べ、かつ飲み、その食物で力づいて四十日四十夜行って、神の山ホレブに着いた（列王記上19章5節－8節）。

エリヤを殺めることを誓う敵の前に、疲労困憊して眠っているで彼に神様から遣わされた御使いは言いました「起きて食べなさい」。エリヤが起きてみると彼の頭の傍には焼け石の上で焼いたパン一個、そして一びんの水がありました。今日でいうならカリッと焼けたトーストと出来立てのコーヒーが枕元に置かれていたということになりますでしょう。彼はそれを食べ、そしてまた眠りました。しばらくの時間が立ったのでしょう、御使いは再び彼のもとに来て言いました。「起きて食べなさい。道が遠くて耐えられないでしょうから」。そうです、「もう、限界だ、私は死にたい、殺してくれ」と願うほどに追い詰められていたエリヤは主が敵の前で彼のために備えたものを十二分にいただき、新たなる力を得たのです。

主にある皆さん、このエリヤの出来事を読みながら思ったのです。私達も確かに敵と向き合うような時、もう越えられないだろうと思われるような問題と直面することが人生にはあります。恐れと不安が私達の心を支配してしまう時です。それこそ、エリヤのように「もう十分だ。このまま死んでしまったほうがいい」なんて思いが心をよぎるような時もあるかもしれない。しかし、私達はそんな人生の危機も必ず乗り越えることができます。心身追い詰められていたエリヤは眠り、そして神様が彼のために備えられたものを食し、そして再び立ちあがったのです。

主は「道が遠くて耐えられないでしょう。心も体もまいってしまうでしょう。だから私は今、あなたが敵の前にいたとしても、その前であなたが食べることができるよう、十二分に栄養を得て、力を取り戻すことができるような食事を備えておきましたよ。さあ、元気を出して食べなさい」と言われるのです。

私達が羊を見ます時に、どう考えても彼らが野獣から自ら身を守るべきものは備えていないことが分かります。野獣は隙があれば、羊に襲いかかるでしょう。しかし、そうであっても彼らは食を取らなければ、休息をとらなければ弱ってしまいます。そんな彼らが敵からの攻撃の餌食になることから守られるとしたら、安心して敵の前に伏し、牧草にありつけることができるとしたら、それはただ一つ、彼らと共にいる羊飼いの存在以外にありません。羊飼いが彼らと共にいるのなら、羊を見守っているのなら、羊のために食を備えてくれるのなら、彼らはたとえ敵の前でも食することができるのです。私たちも恐れや不安にさいなまされることがある。しかし、自分の側にいて下さるお方が誰かを知る時に、そのお方が提供してくれる命の糧、魂の糧をいただくことができるのです。

ユダヤ人にとりまして共に食卓に着くということは最高の親密さを表しました。それは今でもそうです。食事に招いて、食事を備えて、食卓を共にするということは、その相手に対する最大級の好意を意味しました。皆さんご存知のように、聖書の中でイエス様は度々、誰かと食事をしています。ある時はそれが罪人や遊女であったり、ある時は弟子達と親しくイエス様は食事を共にされたのです。イエス様と同席した者達はきっとその食事を楽しんだことでしょう。彼らの体は養われたでしょう。しかし、同時に彼らはイエス様の語る言葉に養われたのです。主は心の糧を彼らに十二分にお与えになったのです。彼らが再びその食卓を立ち上がる時、彼らは明らかにイエス様と共に席についた時とは異なる思いと決意でそこを立ち上がったことでしょう。主は今も24/7、私達にそのような宴を備え、私達を招いてくださっているのです。

エリアがイゼベルという恐るべき敵を前にしていた時に、神様はそのイゼベルをエリヤのもとから除かれるということはなさいませんでした。もちろん、それが可能であってもです。そうではなく、神様はたとえエリアの前にイゼベルという邪悪な人間がいたとしても、自らの前で食を彼のために備えて、彼を再び建ちあがらせたのです。

先週のお話を覚えておりますか。神の愛は「母の愛」、そして「父の愛」を凌駕するものであり、その「父なる愛」には私達に「要求をなさる愛」が込められているということ。母の愛は我が子を悩まし、苦しめる敵を我が子の前からとりさろうとしますでしょう。しかし、父の愛はそれを乗り越えていくことを子に求めるのです。ただし、父はそのために子を一人にはしません。父も子と共にあり、その子の必要な力と知恵を与え、その子がその敵を克服していくことを願うのです。なぜなら、それらを乗り越えるところに大きな収穫があるからです。

主にある皆さん、我々はこの主の備えたもう食卓についているのでしょうか。私達が敵の前に立たざるをえない時、私達は主の備えたもう食をもって自らを力づけているのでしょうか。なぜ、こんなことを皆さんにたずねるのでしょうか。イエス様はかつてこんなたとえ話をされました。

16「ある人が盛大な晩餐会を催して、大ぜいの人を招いた。17晩餐の時刻になったので、招いておいた人たちのもとに僕を送って、『さあ、おいでください。もう準備ができましたから』と言わせた。18ところが、みんな一様に断りはじめた。最初の人、『わたしは土地を買いましたので、行って見なければなりません。どうぞ、おゆるしください』と言った。19ほかの人、『わたしは五対の牛を買いましたので、それをしらべに行くところです。どうぞ、おゆるしください』、20もうひとりの人、『わたしは妻をめぐりましたので、参ることができません』と言った。21僕は帰ってきて、以上の事を主人に報告した。すると家の主人はおこって僕に言った、『いますぐに、町の大通りや小道へ行って、貧乏人、不具者、盲人、足なえなどを、ここへ連れてきなさい』。22僕は言った、『ご主人様、仰せのとおりにいたしました。が、まだ席がございます』。23主人が僕に言った、『道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい。24あなたがたに置いて置かぬが、招かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう』」（ルカ14章16節－24節）。

食が喉を通らないほどの大きな問題にぶち当たっている、もう前にも進めず、後ろにも退くことが出来ない、驚くべきことに、そんな時に私達は主が備えておられるものをも拒む可能性があるのです。「いくらなんでも、そんなことはしないだろう」と私達は思うかもしれませんが、しかし、実際どうでしょうか、事が起きた時、問題と敵対した時、打ちのめされてしまいそうな時、私達はまず主が私達のために備えたもう食卓につくことをしていますでしょうか。いいえ、「あの対策をしよう」「あの人に電話しよう」と主が備えたもう、主イエスが座っておられるその宴卓に座ることなく、その前を忙しなく行き来します。私達はまず何よりも主の前に、主が語りかけてくださる主の御言葉に耳を向け、その糧をいただくべき者でありますのに、私達は主の招きにこたえようとしないのです。

落穂にも書きましたように、日本で最初にカップラーメンが売り出された時、そのラーメンが日本に定着した一つのきっかけとなりましたことは浅間山荘事件でした。立てこもる赤軍と対峙した機動隊員が真冬の長野県で、白い湯気を出しながらすすったカップラーメンが彼らを心身ともに支えたのです。底冷えするよう

## 2016年8月14日 「敵の前に備えられた宴」

な夜、彼らに提供されたカップラーメンはどんなに彼らの体を温め、彼らの心をもう一度、敵に向かわしめる力となったことでしょうか。

たとえ私達の目の前に敵が立ちはだかったとしても、私達は主の備えたもう食卓にまずつきましょ。そこで主に祈りましょ。主が聖書の言葉を通して語りかけてくる霊の糧をいただきましょ。

私達は新しい一週間、ここから出ていきます。もしかしたら心の中にこの週の間に対峙しなければならない、今週、私達を悩ますであろう人の顔が思い浮かんでいる方がいるかもしれません。主が私達に語りかけます。「恐れるな、私はあなたの敵の前であなたのために宴をもうけているから。来て、私と共に食べなさい。道が遠くて耐えられないだろうから」。

私達はこんな恵みをも主からいただいています。すなわち、私達の信仰の友と共に主の備えたもう宴に座り、互いの思いを分かち合い、共に祈り合い、励ましあって、この主の宮から戦いの前線に出ていくことができるということです。モーセを、ダビデを、エリヤをその敵の前で力づけた主が私達と共におります。さあ、ここから出ていきましょう。お祈りましょ。